◎くにまもりの提言㊼◎

参院選で躍進した「第三極」の課題

～国民民主党・参政党は強い野党となれるのか～

相良 優樹（さがら ゆうき）
（しがく総合研究所）

２０２５年７月20日に第27回参院選が行われ、与党である自由民主党と公明党は過半数割れという結果に終わった。50議席以上を獲得すれば過半数維持ができるという非常に低いハードルを乗り越えられなかった与党を尻目に、多くの票を集めたのが「第三極」の国民民主党と参政党だった。

今回の参院選で与党を過半数割れに追い込める野党勢力が生まれたことは、減税をはじめ自公政権が実施せず、国民が期待する政策を実行に移せる点で評価できる。今回は参院選で躍進した政党が今後も影響力のある強い野党になるために必要なことを考える。

期待薄の立民を差し置いて伸びた「第三極」

今回の参院選では自公政権に厳しい結果となっただけではなく、野党第一党の立憲民主党にとってもよい結果ではなかった。自民への逆風が強かった中、立民の議席数は改選前と変わらず伸び悩んだのだ。これは「自公以外の選択肢」として立民が想起されなくなっていることを示唆している。

自公や立民を差し置いて多くの票を集めたのは「第三極」に位置づけられる政党だ。その代表が国民民主と参政だ。前回の衆院選で躍進した国民民主は今回も議席を伸ばし、順調に党勢を拡大している。ダークホースとなったのは参政で、経済や外交を巡る閉塞感を背景に自民の保守系支持層を切り崩した。以下、この二党について分析を進める。

国民民主党は躍進も、候補者選びで課題露呈

国民民主の躍進のきっかけは「手取りを増やす」というキャッチフレーズを打ち出したことだ。主に現役世代の有権者から支持を集め、２０２４年の衆院選では議席数を４倍に増やす大躍進を見せた。今回の参院選も、衆院選での成功体験をもとに「手取りを増やす夏」をキャッチフレーズに、そのための所得税・住民税の減税や、ガソリン暫定税率の廃止などを訴え、現役世代や保守層への支持を拡大。予算を伴う法案を単独で提出できるようになる16議席以上の獲得を目標とし、参院選でも結果として改選前の４議席から17議席に増やした。

ただ、参院選において国民民主のすべての戦略が盤石だったわけではない。象徴的だったのが、候補者選びだ。過去の不倫疑惑や皇室に関する考え方の違いがあるとみられる山尾志桜里元衆院議員らを比例代表に擁立する方針が報じられると、支持率が急落した。

国民民主の課題は議席増を意識するあまり、候補者選定が甘くなることだ。山尾氏の件は明らかに党の方針にそぐわない候補者を擁立したため起こった「事故」であり、このように詰めが甘くなると有権者の信用はすぐに失われる。

参政党は保守層取り込みも、政策を現実路線に戻す必要あり

参政は「日本人ファースト」を掲げ、保守層有権者の取り込みに成功した。選挙区と比例代表でいずれも7議席、計14議席を獲得。2022年の前回参院選では1議席を獲得するにとどまっていたため躍進といえる。

参政の躍進は地道に「党員集め」をしたからに他ならない。この背景にはSNSの普及で党員獲得コストが大きく下がったことがある。都議選に限らず、地方ですでに150議席超であることを踏まえると、総合的な組織力は高い。

課題は政策面にある。既存の政治やメディアに対する不信感を背景に急速に支持を伸ばしたが、その主張の中には科学的・歴史的根拠が曖昧なものや陰謀論と見なされるものもある。例えば2022年出版の『参政党Q&Aブック基礎編』では、連合国軍最高司令部（GHQ）によって小麦が大量に輸入されるようになったとした上で「本来欧米人の間で食べられ続けていた食材」「日本人は小麦に対する耐性を獲得していない」などと主張している。また、過去の演説選挙でも参政幹部が「メロンパン1個食べて翌日死んだ人はたくさんいる」と発言し波紋を呼んだ。参政党は党の公式見解ではないと釈明しているが、現実路線に戻した主張や政策を打ち出す必要がある。

国民民主も参政もここからがスタート

これまでは自公政権が当たり前のように続き、いたずらに野党が乱立しているだけだった。しかし、今回の参院選は過去の政治から変わるような気配がある。キャスティングボートを握る政党がいくつか出てきたことで、広く議論ができる素地が生まれたのは良いことだ。自民を過半数割れさせられる野党の登場で自民に危機感を、国民に期待感を持たせることができたためだ。

この第三極がキャスティングボートを握り続けられるように、国民民主は候補者不足を補うために党方針とずれた候補者を焦って擁立しないことや、実際に選挙で打ち出した公約をしっかりと実行に移せるかどうかが重要となる。参政は陰謀論に影響を受けた言説や政策を現実路線に修正する必要がある。いずれの政党も注目度が高まっているからこそ、ちょっとした失言や失敗によって批判が集まりやすく、第三極の躍進が一過性のムーブメントとして消費される可能性もある。

両党とも、政権与党でも主要野党でもない「第三極」からここまで躍進した。前回の参院選では日本維新の会が躍進したものの、今回の参院選ではその勢いはすっかり影を潜めた。両党はここからがスタートであることを改めて認識し、有権者は両党への期待が政策として反映され、形になるのかどうかをしっかりと見守ることが重要である。

カレント年間購読はコチラ⇩